学校法人　仙台育英学園　秀光中等教育学校

二〇一五年度　第一次仙台選抜試験

国　語

（第一問～第三問）

注意

・試験開始の合図があるまで、問題用紙を開かないこと。
・この問題冊子は十三ページあります。
・答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

第一問　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今の日本のように、景気が低迷し、就職難が続き、社会のさまざまな制度にほころびが目立ってきているような状態では、多くの人が「冒険はしたくない」「リスク[注1]を避けたい」と考えざるをえなくなっても、当然というところがあります。わが子に対して、「一流大学へ入り、一流企業か一流官庁へ就職し、安定した生活を手に入れてほしい」と願う親が増えているのも、ある意味ではしかたのないことかもしれません。それにこういった社会現象は、何も今にはじまったわけではありません。

Ⅰ、みんなが冒険やリスクを恐れていては、今の日本の a ふさがりの状況を変えることはできないでしょう。

日本というのは、既成概念、既成事実、既成の体制を壊すことが、とても苦手な国だと思います。すでにできあがっているものを作り変える勇気や、新しいものを作り出す喜びよりも、できているものを壊すことへの不安の方がずっと大きいために、ブレークスルー（現状打破）をすることが難しくなっているということだと思います。

Ⅱ、日本人はソリューションを概念設計するのが苦手です。

ソリューションは「問題解決」などと訳されますが、実際には、顧客のクレーム処理までもソリューションと呼んだりもしています。これに対して、私自身は、「すでにある技術や情報、モノなどを組み合わせて、新しい価値を生み出すこと」をソリューションと定義しています。

Ⅲ、日本には世界に誇る産業技術や、その成果である商品がいろいろとあります。日本人は、個別の商品を究極のところまで洗練して完成させるということについては得意なのですが、それらをトータルに組み合わせて、最終的に今までなかったような新しい価値やシステムを作り出すことは苦手です。

部品はいくつかバラバラに持っているけれど、それらを組み合わせて何ができるかを考えられないために、国際競争に負けてしまう。これをなんとかしなければダメだと、私はずっと以前から言い続けてきました。ようやく最近、①日本の政府もこのことに気付き、日本企業が本来の意味のソリューションをビジネスとして海外展開するにあたっての、バックアップ[注2]体制作りを準備しはじめています。

けれど、いくら体制を整備しても、一人ひとりの日本人が、「オリジナリティ[注3]を追求して今までにない新しいものを創造しよう」という気持ちにならなければ、本当のソリューションはなかなかできないでしょう。

オリジナリティは、自分力の要素の一つです。私達人間が生きている証でもあります。とても重要なものなのです。②だからみなさんには、自分自身のオリジナリティを常に追い求めていってほしいと思います。

A

今、日本では、「社会に出れば個人の能力が問われる」「個性を持たなきゃいけない」「組織に頼らず個の自立をめざせ」などと、さかんに言われています。

この本のキーワードである自分力は、「自立」「個性」「能力」などを総合したものですが、誰かから「持たなきゃいけない」と強制されるようなものではありません。自分力とは、その名の通り、自分で身につけ、自分で高めていくものです。

ただ、今までバスしか乗ったことのない人に、いきなりF1レースのドライバーになれといっても無理なように、自分力は大人になって急に身につくものではありません。

みなさんくらいの年齢から、意識して自分力を高めていくのが一番確実な方法です。

先に述べたように、私は若い頃、「東大卒、三菱系企業出身、オックスフォード大学教官[注5]」を自分の能力の高さを証明する豪華三点セットと勘違いし、世界中に求職のレターを出して全滅しました。

グローバル社会では、「一流大学、二流大学」や「財閥系、外資系、ベンチャー[注4]」といった日本的な格付けや分類はまったく通用しない。それどころか、「オックスフォードの先生をやっていました」という経歴さえ効かない——。世界の厳しさを痛感させられ、一時はみじめな思いにうちひしがれました。

みなさんにはみじめな思いをしてほしくないので、

Ⅳ 厳しいことを言いましょう。

最後に頼りになるのは自分しかいません。

さらに言えば、みなさんが将来どんな仕事を選ぶにしても、「前例のないことにチャレンジしてみよう」「自分独自の流儀を試してみよう」という志を持ってほしいと思います。

こう言うと、「とてもじゃないけど自分には無理」と思うかもしれませんが、そんなことは絶対にありません。私は別に、「ヨーロッパの一流企業のアドバイザー[注6]になってください」と言っているわけではないのです。

あなたが好きなことを、あなたの自分力を使って見つけ、あなた自身の世界をつくってください、と言っているのです。

もっと簡単に言えば、大好きなことを思いっきりやってください、ということです。それは誰にでもできることでしょう？

そうすれば、精神的に自由で伸び伸びと生きられます。自分に対する自信は、あとから少しずつ、ついてくるはずです。

自分力を身につけ、高めよう——。こう言うと、何かとても大変なことをやらなければならないように感じるかもしれませんが、あまり難しく考える必要はありません。

（答えはすべて解答用紙に記入しなさい）

まずは身近なことから見直していきましょう。たとえば、携帯メールのやりとりです。

日本に来ると、電車の中はいうにおよばず、道を歩いている時でさえ携帯メールのやりとりをしている人を見かけます。こういうシーンを、私はできるだけ見たくない。なぜなら、携帯メールを四六時中やっている人の姿が、携帯電話に振り回されて他のことを何も考えられなくなっている「機械の奴隷」に見えてしまうからです。

携帯電話は確かに便利な道具です。ITが便利なのはいいけれど、フェース・トゥ・フェースのコミュニケーションの重要さが、どんどん忘れられているような気がします。

ここで一つ、みなさんに質問をします。

「携帯メールのやりとりって、絶対に必要なの？」

もしもあなたの答えが「イエス」だとしたら、それは孤独感あるいは淋しさの現れかもしれません。本当に緊急の用事があるわけではなく、「仲間とつながっている」という感覚をキープしたいために、携帯メールのやりとりをしているのではありませんか？

自分力を高めようと思うなら、まずそこから見直すべきだと思います。

もちろん私は、友達とのつながりを否定しているのではありません。携帯電話を持つなとか、メールをすべてやめろ、などと言っているのでもありません。緊急連絡が必要ということだってあるでしょう。

ただ、③自分一人きりになるということの重要さを知ってほしいのです。

携帯メールに振り回され、他のことを考える余力もなくなって、「メールが来ないと淋しい」「携帯がなかったら生きていけない」「メールが来ないのはみんなに嫌われているからだ」といった強迫観念に追い込まれてはいませんか？

もし思い当たる点があるなら、しばらくの間、携帯電話なしで生活してみたらどうでしょう。嘘も方便で「壊れちゃった」ということにして、何日間か、携帯メールから自分を解放してみるのです。

読書が好きな人もいるでしょう。日記を書くことに意味を見出している人もいるでしょう。あるいは公園のベンチに腰掛けて考えることがリフレッシュにつながるという人もいるでしょう。それぞれにあった趣味というものは、人間にとって大事なことです。しかし、どれも、誰かにメールを打ちながらやるものではありません。

朝の洗面の時だってそうです。一人きりでしょう？　鏡の中の自分の顔を見て、「昨日、友達と喧嘩した。今日は普通に話せるかな」とか、「宿題やってない。当てられたらどうしよう」などといろんなことを思いながら、自分自身と会話をしているわけです。その時に携帯メールが気になるようなら、かなり問題です。

一人きりで自分と向き合う時空間には、友達と話したりメールしたりしている時とはまったく違う、独特の感覚があるはずです。

学校の成績や友達関係以外のことで、自分の興味はどんなことに向いているのか。あるいは、どんなことに自信をなくしているのか。成績に自信がないのか、生き方に張りがない

のか、家族との毎日のやりとりがぎくしゃくしているのか、人とのコミュニケーションがうっとうしくなっているのか。そういうことをじっくり考えられるのも、一人で自分と向き合っている時です。

そういう時空間を、どうか大切にしていってください。

オックスフォード時代に「名誉ある失業」の危機に見舞われた頃、私が住んでいた教官用の共同住宅には、グレースという中年の女性が、週末ごとに掃除に来ていました。

グレースおばさんは、いつも楽しそうに鼻歌をうたいながら窓を拭いていました。きっと、家族や友人に恵まれていたのでしょう。そうでなければ、こんなはつらつとした表情はできないと感じるほど、彼女は輝いていました。

その姿を横目で見ながら、次の仕事が見つからない私は、「いつも楽しそうでいいな。この人のほうが僕よりはるかに幸せだ」と、うらやましさを感じたものです。

どうしてグレースの方が僕より幸せなのだろう。何が違うのだろう——。一人でずっと考えたすえに得た答えは、「人生で大切なのは、学歴でも、社会的[注7]ステイタスでも、お金でもない。『自分の宇宙』を持っている人が幸せなんだ」という、ごく当たり前のことでした。

当時の私は、まだ自分力というものを何も確立していませんでした。そんな状態で次の仕事を見つけようともがいていたのだから、毎日がつらくて当然でした。

その点、④グレースにはしっかりとした自分力があり、自分の仕事に対する誇りもあった。だから、いつも楽しげに掃除をしていたのだと思います。幸せな人達はみんな、そういう雰囲気を持っていて、隠そうとしても隠せないのです。

「有名校や有名企業のブランドなんて、幻みたいなものだ。本当は自分以外に何もない。僕が今の自分の存在意義をちゃんと自覚できれば、毎日楽しみを見出すことができる。こうした小さな発見を積み重ねていけば、今までの後ろ向きの[注8]サイクルは前向きのサイクルに変わるはずだ」

「うちは金持ちじゃないし、自分は学校でトップの成績でもない。でも、誰かの人生と取り替えたいなんて思わない」

このような感覚を持っている人こそ、実は打たれ強く、また「自分の宇宙」を形作る潜在能力に恵まれているのです。

問題の都合上、文章の一部を原文と変えています。

（今北純一「自分力を高める」）

注1　リスク……危険性。
注2　バックアップ……うしろだてとなること。
注3　オリジナリティー……独創性。
注4　ベンチャー……新しい高度な技術を生かして、成長性の高い分野に、冒険的に進出する、小規模の企業。
注5　オックスフォード……イギリスにある名門の総合大学。現存する大学としては、世界で三番目に古い。
注6　アドバイザー……助言をしてくれる人。
注7　ステイタス……地位や身分。
注8　サイクル……繰り返し循環すること。

（答えはすべて解答用紙に記入しなさい）

問一 □ Ⅰ～Ⅳに入れるのに最もふさわしい語を次のア～カからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア たとえば　**イ** そこで　**ウ** また
エ でも　**オ** あえて　**カ** まったく

問二 □ aに入れるのに最もふさわしい語を次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 三方　**イ** 後方　**ウ** 八方　**エ** 前方

問三 ＝線「嘘も方便」の意味として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 時には嘘も必要　**イ** 平気で嘘をつく
ウ 嘘が真実になる　**エ** 事実と違(ちが)っている

問四 ＝線①「日本の政府もこのことに気付き」とありますが、その気付いた内容として、最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 国際競争に勝つためには、リスクを避けたビジネスを展開することが大切であるということ。
イ 国際競争に勝つためには、バラバラに持っている部品を組み合わせ、何ができるかを考えること。
ウ 国際競争に勝つためには、世界に誇る産業技術やその成果である商品をさらに宣伝(せんでん)すること。
エ 国際競争に勝つためには、体制を整備して海外展開を大いに推進(すいしん)しなければならないこと。

問五 ＝線②「だからみなさんには、自分自身のオリジナリティを常に追い求めていってほしいと思います」とありますが、筆者は具体的に「何をしてほしい」と呼びかけていますか。A の部分から十九字で書き抜きなさい。

問六 A の部分に小見出しを付けるのに、最もふさわしいものを次の**ア**～**エ**から選び、記号で答えなさい。

ア グローバル社会で自分に対する自信とは
イ グローバル社会で日本的な流儀を試すとは
ウ グローバル社会での豪華三点セットとは
エ グローバル社会で生きるための自分力とは

問七 ――線③「自分一人きりになるということの重要さ」について説明した次の文の空欄に当てはまる語句を、本文中から □ Ⅰは六字、□ Ⅱは四字で書き抜きなさい。

自分一人だけの時空間を持ち、自分のことを Ⅰ（六字）、自分と Ⅱ（四字）ことが大切だから。

問八 ――線④「グレースにはしっかりとした自分力があり、自分の仕事に対する誇りもあった。だから、いつも楽しげに掃除をしていた」とありますが、それができたのはなぜですか。その理由を本文中から「～していたから」に続くように、十六字で書き抜きなさい。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学六年生の立石美楽は、東京に住んでいたが父の仕事の都合で山間の村に引っ越してきた。当初は東京に戻りたい気持ちから、小学校のクラスメイトに心を閉ざしていた。しかし、ある日「明野工房」を営む「デンさん」に出会い、心惹かれていく。そのような中でクラスメイトと出演する音楽会の練習が始まる。木琴を担当する美楽はなかなか上手く演奏できず、クラスのリーダー的存在である優美に怒られてばかりいた。

連合音楽会は、隣町の町立の公会堂で行う。

音楽会の前日、明野工房に行くと、デンさんが、

「これやる」

といって、小さなものを掌にのっけてくれた。それは木彫りのブローチで、木琴をかたどったものだった。ちゃんと半音付きの茶色の木琴、バチまでそえられている。

「すごい！　何でこんな細かく彫れるの？」

わたしの叫びに、デンさんは、ワッハッハと笑った。

「そうきたか、美楽らしいな」

「あたしらしい？」

「ふつうは、かわいい！　とかいわないか？　せめて、ありがとう！　とか」

「そう思ってるよ」

ちょっとぶっきらぼうにいった。本当にそのブローチはすごくかわいくて、わたしはとてもとても嬉しかったのだ。だ

（答えはすべて解答用紙に記入しなさい）

けどやっぱり、そのみごとなできばえに①感嘆するほうが先だったのだ。

「それ、美楽が切った木だよ」

あっ、と思った。電動糸ノコで切ったいろんな形。台形のものを選んで、デンさんは「くれ」といった。喜んであげた。でも、何であんな変な形と思ったっけ。あの時から、あの木は、木琴ブローチになることが決まっていたのだ！

「これ、つけて、音楽会行く」

「ああ、がんばれよ」

連合音楽会の日が来た。場所は隣町にある公会堂だ。だれもがよそゆきのかっこうをしている。桑名商店のマンガ少年、佳樹は、白のVネックのセーターで、今日は髪がはねていない。麻衣はピンクのワンピース。わたしはタータンチェックのスカートに白いブラウス。水色のカーディガンをはおっている。ブラウスの胸元に、デンさん作の木琴ブローチをつけた。

そして優美は、ある意味地味な紺のツーピースを着て、髪は紺のリボンで結んでいるだけだった。それなのに、ぱっと目立つ。これがお嬢さまオーラというものだろう。

連合音楽会の参加校は近隣の六校だった。といっても隣の学校までは、一山越えなくてはならない。公会堂はほぼ満席だった。その中の一角、何だか光が当たっているような感じがすると思うと、そこに優美がいた。

最初は低学年の演奏から始まり、少しずつ学年が上がっていく。午前中は暇だった。弁当は会場の中で食べた。オヤジが作った特製いなりずしに、おかずはサラダと唐揚げ。けっこういける。

ちらっと優美を見る。どんな豪華な弁当を食っているんだろうか、と。二段重ねの、とか？　ところが優美が食べていたのは、シンプルなサンドイッチだった。

前のほうの来賓席に、優美の親が座っているのが見えた。親もVIP[注1]待遇だな。母親は着物だった。やっぱり目立つ。

よその学校の演奏は、頭を素通りしていくだけで、何の印象も残らない。別に順位をつけるわけでもないので、先生たちもわりとお気楽そうだった。

Ⅰ　と会場を眺めているうちに、出番が近づいてきた。

Ⅱ　と舞台裏へ向かう。

今、舞台では、隣町の学校の六年生が合唱をしていた。

②立石さん、すごく落ちついてるね」

と、麻衣が声をかけてきた。

「えっ？」

「あたし、緊張して手が震えそう。どうしよう、どうしよう、失敗しちゃったら、わかるかなあ」

麻衣はアコーディオンだ。失敗したって目立たないだろう。現実に失敗する可能性があるのも、失敗したら目立つのも、わたしのほうだ。

「緊張してないというのは、ああいうのをいうと思う」

わたしは顎で、優美を示す。

「ああ、優美は特別だよ。場慣れしてるもん」

噂されてることに気づいたのか、優美がこっちを見た。

「立石さん、あそこ、気をつけてよ」

自信がなかった。まだまだ、遅れずに弾ける確率は五割を

切っている。
「へい」
まわりが一斉に吹いた。「はい」といったつもりだったのだ。
「何、『へい』って」
緊張するよ、といっていた麻衣が涙を浮かべて笑っている。
「もう、③ミラクってさあ、けっこうおかしいんだから」
「さあ、出番よ～」
注2紀香が素っ頓狂な声でいった。いちばん緊張しているのは、こいつかもしれない。
舞台に立った。胸が［Ⅲ］する。手が小刻みに震えていた。左手で右手をむりやり押さえた。木琴の立ち位置は後ろ。それだけが救いだ。やがて、幕が静かに開く。ブラウスにつけた木琴ブローチにそっと指で触れた。落ちつけ、美楽。デンさんの声が聞こえたような気がした。
紀香が指揮棒を構える。ピアノのほうを向いて合図する。あとは何が何だかわからなかった。気がついたら、終わっていた。自分がちゃんと弾けたのかどうかもわからなかった。一生懸命、ずれないように遅れないように、バチを動かした、ような気がする。だけど……。
――デンさん、落ちつけなかったよ……。
舞台の袖に退く。優美が怖い顔で近寄ってくる。やっちまったのだろうか。
「立石さん！」
「はい」
今度は、「へい」といわずにすんだ。
「やればできるじゃない」
「へっ？　失敗しなかったの？」
優美が笑った。いやみのない笑顔で。
「その木琴ブローチ、いいね」
わたしは、あらためて自分の胸元を見る。またそっと触れる。
「明野さんにもらった」
「それって、ぜいたくなんだよ。明野さん、けっこう有名な木工工芸家なんだから。それに、世界にたった一つなんだから。立石さんのためのブローチ」
「そっか」
そうだよな。ぜいたくだよな。
紀香がにこにこしながらいった。
「すっごくよかったよぉ」
「立石さんの『へい』のおかげだよ。緊張が解けたから」
健人が笑った。ほんとほんと、と声が上がる。笑い声に包まれる。何だか不思議な気分だった。ずっといっしょに練習してきたんだなと思った。だから、わたしもいっしょになって笑った。でも、④ちょっとだけ泣きたくなった。
家にもどるとオフクロがいた。
「来てたの？」
と聞いたけど、本当は気がついていた。東京からやってきた注3キャリアウーマンは、やっぱりちょっとだけ目立っていたから。
「だって、美楽がシロフォン弾くって、お父さん、はしゃいじゃって」

（答えはすべて解答用紙に記入しなさい）

久しぶりに、オフクロが作ったご飯を食べた。おいしかった。オヤジもまあがんばっているが、やっぱり年季が入ってるので、違う。そういうと、オフクロが笑った。

「あと五か月がんばってね」

しばらく会ってないと、やさしい。だって、前はスナック菓子を買ってくるとしぶい顔をするオフクロが、じゃがりこをたくさん持ってきてくれたのだから。サラダ味は、デンさんと食べよう。

次の日、オフクロといっしょに、明野工房に行った。樹木に囲まれた道を並んで歩いたけれど、いいわね、空気がおいしい、風がさわやか、空が高い、と、うるさい。なんのかんのといっても、オヤジと同じようなことをいうのだなあと、妙に感心した。

デンさんは庭にいた。

「立石美楽の母です。いつも美楽がご迷惑をおかけして……」

デンさんは、何の何のと、表情と身振りだけで表現する。わたしは、みやげだといって、じゃがりこを渡した。

「お、サラダ味だな」

デンさんが目を輝かせた。わたしは今日も胸につけていた木琴ブローチを、手で示した。

「これ、ほめられた。あの川越家の跡取り娘に」

「そうか」

と、デンさんは笑い、それからぽつりといった。

「作ってみるか」

「うん、やってみる」

すぐにうなずいた。タメで話すわたしに、オフクロが少しいらいらしているのがわかった。でも、デンさんはにこやかにいった。

「いつもいっしょに楽しく遊んでます」

「あらまあ……」

といったきり、言葉を続けられずに、オフクロはわたしとデンさんを見つめている。

「じゃがりこ友だちだもんな、おれたち」

「うん」

帰り道、オフクロがいった。

「美楽が、二学期から東京にもどるっていった時、それもしかたないかなと思ってたの。東京しか知らないんだものね、あんたは。ここじゃあ、わたしもいっしょにいてあげられないし。しばらく、わたしもおばあちゃんのところに同居させてもらおうかな、とも考えた」

東京にもどるっていった時は、何もいわなかったけれど、そんなこと考えてたのか。オフクロはにやっと笑ってまた口を開いた。

「でも、あれね、美楽がここに⑤留まったわけは」

オフクロはオヤジより鋭かった。

オフクロはその日の午後に、東京にもどっていった。

（濱野京子「木工少女」）

注1　VIP待遇……最重要人物のようにあつかわれること。
注2　紀香……美楽たちの担任の先生。
注3　キャリアウーマン……職業をもった、第一線で活躍する女性。

問一　――線①「感嘆する」が表す「美楽」の気持ちとして最もふさわしいものを次の**ア**～**エ**から選び、記号で答えなさい。

ア　悲しみなげく　　**イ**　うっとり見とれる
ウ　歓び感謝する　　**エ**　驚き感心する

問二　□　**Ⅰ**～**Ⅲ**に入れるのに最もふさわしい語を次の**ア**～**オ**から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　はらはら　　**イ**　どきどき　　**ウ**　ぞろぞろ
エ　ぼんやり　　**オ**　はっきり

問三　――線②、――線③について、「麻衣」が最初は「立石さん」と呼んでいたのが、「ミラク」と呼び方を変えたのはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次の**ア**～**エ**から選び、記号で答えなさい。

ア　最初は少しばかり美楽に距離を感じていたが、一緒に笑うことで遠慮がなくなり親しみの心がわいたから。
イ　最初は緊張から美楽にまでも固くなったが、一緒に笑うことで演奏会のことも頭からなくなったから。
ウ　最初は美楽をライバル視していたが、一緒に笑うことで美楽の少し間の抜けている性格を知って心を許したから。
エ　最初は美楽に嫌味を言うためにわざと丁寧な言い方をしたが、一緒に笑うことで美楽を嫌う気持ちもなくなったから。

問四　――線④「ちょっとだけ泣きたくなった」のはなぜですか。四十字程度で説明しなさい。

問五　――線⑤「留まったわけは」について、「美楽」が峯川村に留まったのはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次の**ア**～**エ**から選び、記号で答えなさい。

ア　父と二人暮らしの方が楽だから。
イ　峯川村の自然が好きになったから。
ウ　デンさんを好きになったから。
エ　木琴の演奏に夢中になったから。

（答えはすべて解答用紙に記入しなさい）

問六　次の部分は本文中のどこに入りますか。その箇所を探し、直前の五字を書き抜きなさい。ただし、句読点も字数に含めます。

これがあったから、うまく弾けたのかな。ありがとう、デンさん……。

問七　═══線「美楽らしいな」とありますが、本文中の「美楽」はどのような少女だと感じますか。最もふさわしいものを次の**ア**～**エ**から選び、記号で答えなさい。

ア　明るく無邪気な少女
イ　不器用で男勝りな少女
ウ　心を開かない暗い少女
エ　強気で目立つことが好きな少女

第三問　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

放浪の画家、山下清が新潟県長岡市の花火大会を訪れたのは一九四九年の夏だった。画材道具は①一切ジサンせずに記憶に焼き付けた光景は貼り絵「長岡の花火」として見事に再現された。

毎年八月二、三日に夜空を華麗に彩る花火大会の原点は、前夜の午後十時半に打ち上げられる白一色の慰霊の花火「白菊」にある。四十五年八月一日の同時刻に始まった長岡空襲は市街地の八割を焼き尽くし、一四八五人が犠牲となった。

戦時中はチュウダンした花火大会は、犠牲者の慰霊と復興を祈り復活した。海外でも上映され話題を呼んだ大林宣彦監督の「この空の花―長岡花火物語」は花火と空襲をモチーフに戦争の惨禍を訴えかけた作品だった。

新たな花も咲き始めている。長岡市と米ハワイ州ホノルル市が姉妹都市となり二〇一二年から毎春、ワイキキビーチ沖で長岡花火が披露されている。長岡は真珠湾攻撃を指揮した山本五十六[注2]の出身地だが、開戦反対論者だったことを踏まえ、地道に相互理解を深めていった。米国はテロ対策で海外からの花火の搬入などが厳重にキセイされている。それでも故ダニエル・イノウエ米上院議員らの協力で打ち上げが実現したのだという。

その両市にいま、来年八月に真珠湾で長岡花火を打ち上げる③構想がある。戦後七十年の節目にあたり、互いの犠牲者へ

の慰霊や平和への願いを託(たく)す思いからだ。

山下清はみんなが爆弾(ばくだん)なんかつくらないで、きれいな花火ばかりつくっていたらきっと戦争なんて起きなかったんだなとの言葉も残した。世代と国境を超(こ)え、④人の心をときめかせる大輪には、⑤確かにそうおもわせる力がある。

問題の都合上、文章の一部を原文と変えています。

（毎日新聞「余録」二〇一四年七月二十八日掲載）

注1　真珠湾攻撃……一九四一年のこの攻撃により日米の戦いが始まった。

注2　山本五十六……連合艦隊司令長官。

問一　〰〰線a〜fのカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

a　ジサン　　b　チュウダン　　c　地道

d　対策　　e　厳重　　f　キセイ

問二　═══線「画」の字の総画数は何画ですか。また、この字の太字の部分は何画目ですか。それぞれ漢数字で答えなさい。

画

問三　――線①「一切」の意味をひらがな四字で書きなさい。

問四　――線②の「が」と同じ使われ方の「が」はどれですか。最もふさわしいものを次の**ア**〜**エ**から選び、記号で答えなさい。

ア　つらいががまんしよう。

イ　字もうまいが、文章もうまい。

ウ　春が来た。

エ　あのなまけ者めが。

問五　――線③の「構想」がもたれたのはどのような思いがあったからですか。本文中から二十二字で書き抜きなさい。

問六　――線④「人の心をときめかせる大輪」とは何のことですか。漢字二字で答えなさい。

（答えはすべて解答用紙に記入しなさい）

問七　――線⑤「確かにそうおもわせる力がある」とありますが、これは本文中のどの部分をさしていますか。四十九字で探し、最初と最後の四字を書き抜きなさい。ただし、読点も字数に含めます。

問八　本文中の**ア**～**エ**を時代の古い順に並べかえ、記号で答えなさい。

ア　貼り絵「長岡の花火」
イ　真珠湾攻撃
ウ　ワイキキビーチ沖長岡花火
エ　長岡空襲

（答えはすべて解答用紙に記入しなさい）